坂口安吾と「歴史」

白濵　翔太

1　問題の所在

坂口安吾に関する研究は、現在に至るまでに数多くの論者が触れてきたこともあり、量・質ともにかなりの蓄積があると言える。安吾と言えば、やはり「堕落論」を思い浮かべる人が多いだろう。敗戦後、「堕落論」を発表した安吾は一躍時代の寵児となり、流行作家となっていった。戦前に発表した作品も少なくはないが、安吾が生涯で発表した作品のうち、大半は戦後に発表されたものである。結果として安吾は、短篇を中心として、膨大な数の作品を残すこととなった。安吾の作品を読んでいると、「歴史」を題材とした文章が多いことに気がつく。だからといって「歴史」を題材とした歴史小説ばかり書いていたというわけでもなく、エッセイや評論文の中でも「歴史」について触れていることが多い。安吾は「歴史」を見つめることによって何を思考しようとしていたのだろうか。例えば「堕落論」の中には次のような一節がある。

> 特攻隊の勇士はたゞ幻影であるにすぎず、人間の歴史は闇屋となるところから始るのではないのか。未亡人が使徒たることも幻影であるにすぎず、新たな面影を宿すところから人間の歴史が始まるのではないのか。そして或ひは天皇もたゞ幻影であるにすぎず、たゞの人間になるところから真実の天皇の歴史が始まるのかも知れない。[1]

この文章からは、「始まり」にこだわる安吾の姿が見て取れる。[2] 敗戦を機に、戦前から続く封建遺制を捨て去り、新たな「始まり」を求めているのである。それはつまり安吾が「戦後」という時代の到来に期待をかけていたということであろう。安吾は一九五五年二月にこの世を去るが、その直前まで、精力的に執筆活動を行っており、執筆予定であったと思われるメモも数多く残されている。これはまさしく、「歴史」を見つめることを通して、「戦後」という時代の在り方を問い続けた作家であると言っても過言ではないのではなかろうか。

そこで、本稿では「堕落論」と「続堕落論」の二篇を中心として論じつつ、安吾が考えていた「戦後」の在り方というところまでを視座として、安吾と「歴史」というテーマについて考えていく。

「堕落論」は一九四六年四月一日、『新潮』第四三巻第四号に発表された。そして、その八ヵ月後の一二月一日には『文学季刊』第二号において「続堕落論」が発表されている。[3] 本節では「堕落論」と「続堕落論」における安吾の問題意識の共通性や違いに注目しつつ、両テクストについて考えていきたいと思う。というのも、「堕落論」には

数多くの先行研究が存在する。しかし、「続堕落論」については、それほど深くは触れられてきていないようである。その理由としては、「堕落論」と「続堕落論」の共通性ばかりが重視され、「堕落論」を論じる際に、「続堕落論」は、それを補完する形で用いられることが多かったということ、また城殿智行が「柄谷の要約は、「続堕落論」（「文学季刊」昭二一・一二）をよく纏めているといえるのかも知れない」[4]と述べていることにも象徴されるように、「堕落論」論として提出された柄谷行人の安吾論[6]がコード化してしまい、「堕落論」と「続堕落論」の違いについて顧みることがされてこなかったということを挙げることができるだろう。

だが、近年では、そのような流れを見直そうとする研究もなされてきている。その中のひとつに五味渕典嗣の論考[7]がある。五味渕は「堕落論」と「続堕落論」との間には「無視できない懸隔がある」とし、「堕落論」と「続堕落論」とを隔てている八ヵ月という時間に介入を試みており、安吾が両テクストを執筆した状況について考察を加えている。そこでは、「坂口安吾は、〈三月六日草案〉に、他の多くの人々のように〈始まり〉を見たのだった。そして「私はたゞ人間を愛す」（「デカダン文学論」『新潮』一九四六・一〇）と書いた彼は、「国民」「日本人」が、敗戦の現実を自ら、真の出発の機会とすることに期待をかけたに相違ない」と述べられており、安吾が「堕落論」を執筆していた最中だと思われる、一九四六年三月六日に発表された憲法草案要綱に、彼は〈始まり〉を見ていたという指摘がなされている。その一方で、両テクスト間における、話者の位置取りの差異にも注目している。五味渕は「「続堕落論」における話者のスタンスはいささか不安定である」[8]とし、「続堕落論」には「予測と希望を裏切られた、やり場のないやりきれない思い」が憤りとなってあらわれていると言う。このことから、安吾は、「〈始まり〉を本当には始めなかったという事実を突きつけている」と結論づけている。しかし、五味渕の論は、論題にもあるように「天皇論」として書かれているため、歴史認識といったところまでは述べられてはいない。ゆえに、両テクストにおける話者の位置取りの差異への着目という視点を受けつつ、八ヵ月という時間を加味して、「歴史」という観点からもう一度とらえ直したときに見えてくる、安吾の歴史認識というものについて考察していきたい。

他には山根龍一の論考[9]を挙げることができる。山根は、柄谷の安吾論を下敷きとしていく方法では、すくいきれない側面があるとし、主に表現分析を中心として「堕落論」一篇の精読を行っている。そして「堕落論」には「一見不要な饒舌とも思えるような、論旨を一本化しづらい箇所がいくつか存在する」と述べ、次の箇所を引用している。

> まったく美しいものを美しいまゝで終らせたいなどと希ふことは小さな人情で、私の姪の場合にしたところで、自殺などせず生きぬきそして地獄に堕ちて暗黒の曠野をさまよふことを希ふべきであるかも知れぬ。現に私自身が自分に課した文学の道とはかゝる曠野の流浪であるが、それにも拘らず美しいものを美しいまゝで終らせたいという小さな希ひを消し去るわけにも行かぬ。未完の美は美ではない。その当然堕ちるべき地獄での遍歴に淪落自体が美でありうる時に始めて美とよびうるのかも知れないが、二十の処女をわざく六十の老醜の姿の上で常に見つめなければならぬのか。これは私には分らない。私は二十の美女を好む。

ここでは「美しいものを美しいまゝで終らせたいなどと希ふこと」と「地獄に堕ちて暗黒の曠野をさまよふこと」とを対置して前者を否

定するかと思えば、「が、それにも拘らず」という逆説の措辞を介して、「未完の美は美ではない」とし、再び前者を肯定している。しかし再び、「その当然堕ちるべき地獄での遍歴に淪落自体が美でありうる時に始めて美とよびうるのかも知れない」と述べ、「未完の美」も「美」である可能性も否定できずに、「最終的には合理的判定そのものを放棄して、プライベートな好悪の次元で結論づけ」ており、さらには「プライベートな創造領域に引き付けて明言を回避」していると山根は述べる。そして、「武士道的なエートスと親和性を持つ〈美しいものを美しいまゝで終わらせたい〉という〈一般的な心情〉や、〈歴史のぬきさしならぬ意志〉による戦争という運命を、あくまで〈私〉個人の具体的・個別的領域において捉え直していこうとする志向の存在」を指摘している。山根は「少なくとも言語芸術の問題として考えた場合、〈堕落〉を方法手段とする〈歴史〉作用の〈自分自身〉に固有なものへの組みかえとはおそらく、（中略）「私語り」のような形でしか言語表現化できないのではあるまいか」と述べ、安吾のこのような表現を評価している。山根のようにレトリックに着目した論考は大変示唆に富むものである。しかし、論考の中で「堕落論」と「続堕落論」との差異については言及しつつも、その部分に関しての具体的な考察はなされていない。ゆえに、「続堕落論」において山根の見解がどこまでの有効性を持ち得ているのかという検証が必要になってくるだろう。

以上の先行研究をもとに、「歴史」という語をキーワードとして両テクストをもう一度精読していきたい。安吾が最初は「続堕落論」をも「堕落論」と題して発表したということ、しかも最初の「堕落論」の発表から八ヵ月という期間で、同題の作品を発表したということは、「堕落論」と「続堕落論」との間には、何か一貫した問題意識があるとともに、「堕落論」では見出せない安吾の主張が「続堕落論」ではあらわれているのではないだろうか。そしてさらには、「堕落論」以降、安吾が没するまで続いていく、彼の「歴史」への関心という問題にも接続していければと思う。

2　安吾の歴史認識の転換点

まずは、「堕落論」と「続堕落論」において、安吾が「歴史」というものをどのようにとらえていたのかということの検証を行いたい。以下は「歴史」について述べてある部分の「堕落論」からの引用である。

> 小林秀雄は政治家のタイプを独創をもたずたゞ管理し支配する人種と称してゐるが、必ずしもさうではないやうだ。政治家の大多数は常にさうであるけれども、少数の天才は管理や支配の方法に独創をもち、それが凡庸な政治家の規範となつて個々の時代、個々の政治を貫く一つの歴史の形で巨大な生き者の意志を示してゐる。政治の場合に於て、歴史は個をつなぎ合せたものではなく、個を没入せしめた別個の巨大な生物となつて誕生し、歴史の姿に於て政治も亦巨大な独創を行つてゐるのである。この戦争をやつた者は誰であるか、東条であり軍部であるか。さうでもあるが、然し又、日本を貫く巨大な生物、歴史のぬきさしならぬ意志であつたに相違ない。日本人は歴史の前ではたゞ運命に従順な子供であつたにすぎない。政治家によし独創はなくとも、政治は歴史の姿に於て独創をもち、意慾をもち、やむべからざる歩調をもつて大海の波の如くに歩いて行く。何人が武士道を案出したか。之も亦歴史の独創、又は嗅覚であつたであらう。歴史は常に人間を嗅

ぎだしてゐる。

ここでは「政治の場合に於て」と書かれてはいるが、「歴史」とは「個をつなぎ合せたものではなく、個を没入せしめた別個の巨大な生物」であり、「巨大な独創を行つている」ものであると説明されている。そして、「東条や軍部」だけでなく、「日本を貫く巨大な生物、歴史のぬきさしならぬ意志」こそが「戦争をやつた者」であり、「日本人は歴史の前ではただ運命に従順な子供であつたにすぎない」とする部分においては、神谷忠孝が指摘するように、「一歩まちがえば運命論に流れ歴史をすべて肯定することになってしまう」[10]だろう。しかし、この運命論的な歴史観を内面化しつつ、一方でそれを乗り越えていこうとする試みが、先に触れた山根が指摘している、安吾の「私語り」の部分である。さらに付け加えて言うと、安吾が「歴史」を擬人化して語っていることにも注目したい。ここでは「歴史」と「政治」はほぼ同義語として使用されているが、「政治」を行うのは「政治家」である。そして「政治家」の中の「少数の天才」の「独創」が「規範」となり、「歴史の形で巨大な生き者の意志を示」すことになる。「戦争をやつた者」とされる「日本を貫く巨大な生物、歴史のぬきさしならぬ意志」も、元をたどれば「少数の天才」によって生み出されているのである。「日本人は歴史の前ではただ運命に従順な子供であったにすぎない」と述べる安吾が「歴史」をどのようにとらえていたのかという問題に関わるだろうが、ここでは、運命論的なニュアンスを醸しだしつつも、「歴史」も人間の手によって作り出されたものであるということが示唆されており、安吾が「人為の卑小さ」を指摘していることを考えると「堕落論」末尾の一文で「政治による救ひなどは上皮だけの愚にもつかない物である」と述べている安吾の考えのあらわれだととらえることが可能ではないだろうか。

続いて「続堕落論」における「歴史」について書かれている箇所からの引用である。

大化改新以来、農村精神とは脱税を案出する不撓不屈の精神で、浮浪人となつて脱税し、戸籍をごまかして脱税し、そして彼等農民達の小さな個々の悪戦苦闘の脱税行為が実は日本経済の結び目であり、それによつて荘園が起り、荘園が栄え、荘園が衰へ、貴族が亡びて武士が興つた。農民達の税との戦ひ、その不撓不屈の脱税行為によつて日本の政治が変動し、日本の歴史が移り変つてゐる。（中略）彼等は常に受身である。自分の方からかうしたいとは言はず、又、言い得ない。その代り押しつけられた事柄を彼等独特のずるさによつて処理してをるので、そしてその受身のずるさが、孜々として、日本の歴史を動かしてきたのであつた。

「続堕落論」では、「歴史」は「農民達の税との戦い、その不撓不屈の脱税行為」によって移り変わってきたとされるとともに、「農民達」の「受身のずるさ」が「歴史を動かしてきた」とされている。「堕落論」との大きな違いは、運命論的なニュアンスは完全に捨象されているという点にある。そして、「堕落論」においては「歴史」は「ぬきさしならぬ意志」をもって自ら動いているものとしてとらえられているが、「続堕落論」において、「歴史」は「農民達」の「脱税行為」や「受身のずるさ」によって動かされているのである。この違いはどう見るべきであろうか。先にも挙げた山根は[11]「歴史」と「人間主体」の関係として次のようにとらえている。

〈歴史〉と人間主体との関係は、必ずしも「支配↓服従」に固定した不可逆的な関係のみではなく、あくまで人間の側に基軸をすえ、そこから〈歴史〉に働きかける可逆的な関係もありうるということ。〈歴史といふ生き物の巨大さと同様に人間自体も驚くほど巨大だ。〉（四三頁）という一文は、両者の関係の不均衡を是正するそうした関係の構築可能性を端的に示唆していよう。

山根は「堕落論」のみしか扱っていないが、「続堕落論」における安吾の「歴史」認識を、「堕落論」からも読み取れるということを示唆していると言える。しかし、「続堕落論」における安吾の「歴史」認識は「堕落論」においては、まだ可能性の萌芽のようなものであったにもかかわらず、「続堕落論」において、こうもはっきりと認識の変化があらわれているのはなぜだろうか。神谷は「「堕落論」に向けられた民主主義文学の立場からの批判は安吾の反進歩主義を指摘するものが多く、天皇制擁護と受け取られる危険性をはらんでいた」とし、「誤解」を解くために「続堕落論」を書かなければならなかったと述べている。[12]だが、管見の限りでは、「堕落論」に触れた最初の同時代評は、一九四七年二月に発表された中島健蔵のものである。[13]「続堕落論」が発表されたのは一九四六年一二月のことなので、「続堕落論」が同時代評に対する反応として書かれたものではない可能性が高いだろう。ここで、「堕落論」と「続堕落論」との間にある八ヵ月という時間について考えてみたい。

五味渕は、「分量的には短いが、さまざまな点で「堕落論」と「続堕落論」の間をつなぐ重要なエッセイ」[14]であるとして、一九四六年六月に発表された「天皇小論」を挙げている。その「天皇小論」の冒頭部分では次のように述べられている。

日本は天皇によつて終戦の混乱から救はれたといふが常識であるが、之は嘘だ。日本人は内心厭なことでも大義名分らしきものがないと厭だと言へないところがあり、いはゞ大義名分といふものはさういふ意味で利用せられてきたのであるが、今度の戦争でも天皇の名によつて矛をすてたといふのは狡猾な表面にすぎず、なんとかうまく戦争をやめたいと内々誰しも考へてをり、政治家がそれを利用し、人民が又さらにそれを利用したゞけにすぎない。

安吾は「日本は天皇によつて終戦の混乱から救はれた」という「歴史」を嘘だと否定する。そして、その「歴史のカラクリ」を暴いていると言えるだろう。しかし、ここで述べられていることは「続堕落論」により近い。なぜならば、「天皇の名によつて矛をすてた」という考えは「狡猾な表面」にすぎないと述べ、誰しもが考えていた「戦争をやめたい」という思いを、「政治家」、「人民」が利用したにすぎないとしている。これは「続堕落論」で用いられている「受身のずるさ」という言葉と通じるものがあるだろう。安吾の中から運命論的な要素はこの時点で消えている。「歴史」と「人間」の関係として、「人間」は「歴史」に服従する他ないという態度はここからは読み取れず、むしろ「人間」の働きかけによって「歴史」が動いてきたと読める。これは安吾の歴史認識が定まったのが、戦後のこの時期であることを示唆しているとはいえないだろうか。運命論的な歴史認識と、それを懐疑的にとらえ、相対化しようとする歴史認識とが共存していたのが「堕落論」執筆時、つまり敗戦直後であり、そこから安吾の歴史認識は、いわゆるポストモダン的なものに変化していったとみるべきではないだろうか。

「堕落論」と「続堕落論」との差異を先行研究よりもさらに細かく見ていくことによって、両テクストを一貫した問題意識のもとで書かれたものであるという従来の見方ではとらえることのできない、安吾の思考の一端をとらえることができたのではないかと思う。そこでは、五味渕が指摘したような、「続堕落論」では「予測と希望を裏切られた、やり場のないやりきれない思い」が憤りとなってあらわれているということや、「〈始まり〉を本当には始めなかったという事実を突きつけている」ということだけでなく、歴史意識の変化をも見て取れたと言えるだろう。

3　安吾の「天皇／天皇制」論

「戦後」という時代を考える際に「天皇／天皇制」に関する問題は避けて通ることのできない問題だろう。「天皇／天皇制」問題は「戦中」においてはもとより、「戦後」という時代の中でもタブー視されてきたきらいがある。いくつか例を挙げると、熊沢天皇問題や本島等が天皇には戦争責任があるという発言をしたために右翼に襲撃されるという事件の報道のされ方などがタブー視を象徴していると言える。ここでは、主に敗戦直後という時代の中で、「天皇／天皇制」はどのように議論されてきたのかを概括し、安吾の「天皇／天皇制」論というものについて考察していきたい。

まずは敗戦時における天皇／天皇制に関する議論について簡単にまとめておきたいと思う。連合国や占領軍、そして日本政府はそれぞれ戦後の「天皇／天皇制」の在り方を議論していた。まずは昭和天皇の戦争責任に関してや、天皇制を存続させるか否かの議論が交わされていったが、国民からの支持が厚い昭和天皇を占領政策に利用できると考えた占領軍は天皇制の存続を決めた。しかし、連合国からの反発は強かったことが先行研究でも指摘されている。それでも昭和天皇の戦争責任が不問にされ、天皇制が存続したのには様々な理由が存在すると言える。藏滿茂明は以下の点を指摘している。[15]

①「占領に際して日本国民の意思を重視していたアメリカは、占領政策そのものを「成功」させるためには占領の結果樹立された政府が日本国民によって支持されることが絶対条件であった」こと。

②もしも天皇に戦争責任を問うことになれば、天皇擁護論が大半を占めている日本国民による反乱が懸念され、その対応に追われ、占領政策がスムーズに進まないであろうこと。

③「次第に冷戦体制が構築され始めていた国際環境における長期的なアメリカの国益の観点からも必要な「力」として天皇制存続の有用性が」あったこと。

このような議論がなされる中で、一九四六年六月一八日、東京裁判の主席検察官だったキーナンは昭和天皇の戦争責任を不問に付すことを決めた。ちょうどこの頃から、「天皇／天皇制」に関する議論は制度を存続するか否かという問題から、天皇にどのような権限、権威を残すのか、また昭和天皇の退位問題へと議論は移行していった。

このような時代の中で発表されたのが安吾の「堕落論」である。安吾が戦後に「天皇／天皇制」についていち早く述べたのはその「堕落論」の中においてである。

私は天皇制に就いても、極めて日本的な（従つて或ひは独創的な）政治的作品を見るのである。天皇制は天皇によつて生みだされたものではない。天皇は時に自ら陰謀を起したこともあるけれ

ども、概して何もしてをらず、その陰謀は常に成功のためしがなく、島流しとなつたり、山奥へ逃げたり、そして結局常に政治的理由によつてその存立を認められてきた。社会的に忘れた時にすら政治的に担ぎだされてくるのであつて、その存立の政治的理由はいはゞ政治家達の嗅覚によるもので、彼等は日本人の性癖を洞察し、その性癖の中に天皇制を発見してゐた。

ここにあらわれているのは、天皇制は天皇が作り出したものではなく、政治的な理由によって、政治家達に作り出されたものだという考え方である。また、五味渕典嗣も指摘するように「堕落論」執筆時点では、安吾は天皇制廃止を主張していない。[16] むしろ、「日本人は歴史の前ではただ従順な子供であったにすぎない」というような運命論的な歴史観をにおわせるような記述や、次のような箇所を見れば天皇制を擁護しているととらえられてもおかしくはないだろう。

要するに天皇制といふものも武士道と同種のもので、女心は変り易いから「節婦は二夫に見えず」といふ、禁止自体は非人間的、反人性的であるけれども、洞察の真理に於て人間的であることゝ同様に、天皇制自体は真理ではなく、又、自然でもないが、そこに至る歴史的な発見や洞察に於て軽々しく否定しがたい深刻な意味を含んでをり、たゞ表面的な真理や自然法則だけでは割り切れない。

「堕落論」執筆時の安吾は、天皇と天皇制を分けて考えるということはしているが、天皇制という制度に至るまでの発見や洞察には「軽々しく否定しがたい深刻な意味を含んでおり、ただ表面的な真理や自然法則だけでは割り切れない」と述べている。しかし、「続堕落論」では、「堕落論」に見られるような「天皇／天皇制」に対する考え方に変化が見て取れる。天皇は「概して何もしておらず」という認識自体は共通しているが、明確に天皇制廃止と取れることをも述べている。

天皇制が存続し、かゝる歴史的カラクリが日本の観念にからみ残つて作用する限り、日本に人間の、人性の正しい開花はのぞむことができないのだ。人間の正しい光は永遠にとざされ、真の人間的幸福も、人間的苦悩も、すべて人間の真実なる姿は日本を訪れる時がないだらう。

では、天皇制がなくなれば「人性の正しい開花」をのぞむことができるのか。その答えに関わることとして、安吾は次のようにも述べている。

政治、そして社会制度は目のあらい網であり、人間は永遠に網にかゝらぬ魚である。天皇制といふカラクリを打破して新たな制度をつくつても、それも所詮カラクリの一つの進化にすぎないこともまぬかれがたい運命なのだ。人間は常に網からこぼれ、堕落し、そして制度は人間によつて復讐される。

結局は、天皇制がなくなったとしても、新たな制度によって「人性の正しい開花」は妨げられるというのが安吾の考えであろう。だからこそ「続堕落論」の末尾で語っているように、「我々の為しうることは、たゞ、少しづゝ良くなれ、といふことで、人間の堕落の限界も、実は案外、その程度でしか有り得ない。人は無限に堕ちきれるほど堅

牢な精神にめぐまれてゐない。何物かカラクリにたよつて落下をくひとめずにゐられなくなるであらう。そのカラクリを、つくり、そのカラクリをくづし、そして人間はすゝむ」。また、五味渕も次のように指摘している。[17]

安吾は天皇制なかりせば「人性の正しい開花」が訪れると言ってはいない。「天皇制というカラクリを打破して新しい制度をつくっても」所詮「カラクリ」の一つでしかないという考えは一貫している。彼の主張は、天皇制の存在が、彼の考える「人性の正しい開花」を妨げる障碍である、という一事である。彼にとって天皇制廃棄は、いわゆる必要条件でしかない。

ここまで「天皇制」についての安吾の考えは、五味渕の論考を中心とした先行研究に沿う形で確認してきた。しかし「天皇」についての安吾の考えについてはまだ多少なりとも考察の余地が残されているように思われる。安吾が「天皇」と「天皇制」を分けて考えているということは安吾の文章を読めばわかることである。「天皇制」についての安吾の議論は、「堕落」という言葉をもってして安吾独特の論が展開されていると思われるが、「天皇」自身についてはどうであろうか。「堕落論」の中では、「天皇は時に自ら陰謀を起したこともあるけれども、概して何もしてをらず、その陰謀は常に成功のためしがなく、島流しとなつたり、山奥へ逃げたり、そして結局常に政治的理由によつてその存立を認められてき」ており、「社会的に忘れた時にすら政治的に担ぎだされてくる」者だと述べられている。さらには「天皇制」に関しては考えの変化が見て取れた「続堕落論」においても、「天皇」のことに関しては、「堕落論」からの認識の変化はあまり見て取れず、次のように述べられている。

自分自らを神と称し絶対の尊厳を人民に要求することは不可能だ。だが、自分が天皇にぬかづくことによつて天皇を神たらしめ、それを人民に押しつけることは可能なのである。（中略）

それは遠い歴史の藤原氏や武家のみの物語ではないのだ。見給へ。この戦争がさうではないか。実際天皇は知らないのだ。命令してはゐないのだ。たゞ軍人の意志である。（中略）何たる軍部の専断横行であるか。しかもその軍人たるや、かくの如くに天皇をないがしろにし、根底的に天皇を冒瀆しながら、盲目的に天皇を崇拝してゐるのである。

安吾は、天皇自身は利用されてきただけの人物であり、戦争も「軍部の専断横行」によって引き起こされたものだと述べている。この「軍部の専断横行」については当時においてもよく言われていたことである。一九四五年一二月に行われているアメリカ戦略爆撃調査団による「敗戦後の国民意識」という調査によれば、昭和天皇の在位を望む人は、調査対象者五〇〇〇人のうち約七割を占めており、「天皇陛下が戦争の復讐や責めを負うべきではない（中略）実際には軍部が戦争を独断で遂行していたのであり、天皇をスポークスマンとして常に利用していた」[18]というような国民の言葉まで残っている。そう考えると天皇自身について安吾が「堕落論」や「続堕落論」で述べていることは、決して珍しいことではなかったということになろう。それではなぜ安吾は「軍部の専断横行」説をそのまま採用したのだろうか。その部分の考察に入る前に、もう少しだけ安吾の天皇に対する言説を整理しておきたいと思う。ここまでは「堕落論」と「続堕落論」を取りあげて

きたが、以降では別のテクストにおける安吾の天皇言説をみていきたい。まずは先にも触れた「天皇小論」という短いエッセイである。そこでは天皇について以下のように語られている。

日本的知性の中から封建的欺瞞をとりさるためには天皇をたゞの天皇家になつて貰ふことがどうしても必要で、歴代の山陵や三種の神器なども科学の当然な検討の対象としてすべて神格をとり去ることが絶対的に必要だ。科学の前に公平な一人間となることが日本の歴史的発展のために必要欠くべからざることなのであり、科学の前に裸となりたゞの人間となつても、尚、日本人の生活に天皇制が必要であつたら、必要に応じた天皇制をつくるがよい。人間天皇は機関として存否を論ぜられるのは当然であるが、単純に政治的にのみ論ぜらるべきではなく、一応科学の前で裸の人間にした上で、更に宗教的な深さに戻つて考察せられることが必要だと思ふ。

この文章は、いくつかの先行研究においても触れられているように、一九四六年の元旦に発せられた、いわゆる「人間宣言」を踏まえていると思われる。「人間宣言」において天皇は自身の神格化を否定してはいるが、以降の日本の中で、安吾の言うように「たゞの人間」となったかと言われればそうではない。そのことに対する反発が一九四八年一月に発表された「天皇陛下にさゝぐる言葉」の中では綴られている。今まで安吾は自身の文章の中で、天皇に触れることはあっても批判はしてはこなかったが、この文章の中では地方巡幸を行う天皇に対して批判がなされている。天皇の行く先々がきれいに掃除されていくため「天皇は箒である」という皮肉を込めた記事が『真相』という雑誌に掲載された。安吾はその記事に同意を示している。しかし、「天皇陛下にさゝぐる言葉」の中でも今まで安吾が述べていたことと同様に「天皇というものに、実際の尊厳のあるべきイワレはないのである。日本に残る一番古い家柄、そして過去に日本を支配した名門である、ということの外に意味はな」いと述べられている。そしてまた、この文章では、天皇に対する批判とともに、天皇を担ぎ出そうとする人々への批判をも見て取れる。「堕落論」で述べられていた状況は何一つ変わっていないのだ。

ここで話を戻して安吾が「軍部の専断横行」説をあっさりと受け入れてしまっているのはなぜかという問題について考えてみたいと思う。前節において、「堕落論」と「続堕落論」との違いを指摘する中で、安吾の運命論的な歴史観がポストモダン的な歴史観へ変化していったことについて述べた。「堕落論」以降から安吾は歴史を相対化して見つめていこうとする。その時に見えてきたものとして、人々の「受身のずるさ」を挙げることができる。「堕落論」では「受身のずるさ」というような言葉は使われていないし、政治家達によって、「天皇／天皇制」は存在してきたとされる。しかし、「続堕落論」には「堕落論」には登場しなかったもう一つの視点が組み込まれる。それが「国民」の視点だ。「受身のずるさ」という語は主にこの「国民」に向けられていると言っても過言ではないだろう。「続堕落論」には次のような一節がある。

昨年八月十五日、天皇の名によつて終戦となり、天皇によつて救はれたと人々は言ふけれども、日本歴史の証するとこを見れば、常に天皇とはかゝる非常の処理に対して日本歴史のあみだした独創的な作品であり方策であり、奥の手であり、軍部はこの奥の手

を本能的に知つてをり、我々国民又この奥の手を本能的に待ちかまへてをり、かくて軍部日本人合作の大詰の一幕が八月十五日となつた。

「堕落論」においては政治家が天皇を利用してきたということが述べられていたが、「続堕落論」においてはそこに「国民」も登場する。国民も天皇を利用しているという指摘を安吾はしている。先にも少し触れたが、昭和天皇を支持する声は国民の中では多かったとされる。先にも引用した「天皇陛下が戦争の復讐や責めを負うべきではない（中略）実際には軍部が戦争を独断で遂行していたのであり、天皇をスポークスマンとして常に利用していた」という言葉や、「天皇の名によって終戦となり、天皇によって救われた」と言う人々が多かったということだ。このことは、天皇自身は戦争責任を免れ、天皇制も存続する要因として大きいものであろう。しかし、安吾独自の視点とも言えるのが、国民の「受身のずるさ」の指摘である。「続堕落論」では、まくしたてるような勢いで先の引用に続けて次のように書かれている。

たへがたきを忍び、忍びがたきを忍んで、朕の命令に服してくれといふ。すると国民は泣いて、外ならぬ陛下の命令だから、忍びがたいけれども忍んで負けやう、と言ふ。嘘をつけ！嘘をつけ！嘘をつけ！

我等国民は戦争をやめたくて仕方がなかつたのではないか。（中略）最も天皇を冒瀆する軍人が天皇を崇拝するが如くに、我々国民はさのみ天皇を崇拝しないが、天皇を利用することには狎れてをり、その自らの狡猾さ、大義名分といふずるい看板をさとらずに、天皇の尊厳の御利益を謳歌してゐる。

引用中にある「我等国民」や「我々国民」の中にはもちろん安吾自身も含まれているのだろう。とするならば、安吾は「軍部の専断横行」説をただ受け入れているのではなく、内在的な批判者たりえていると言えるのではないだろうか。

4　坂口安吾と小林秀雄（一）

安吾の歴史認識に関しては前述してきたとおりだが、ここでは前節で指摘した安吾の歴史認識の転換というものを小林秀雄の言説と絡めつつ考察していく。なぜ小林秀雄を扱うかというと、本稿の中心として扱っている「堕落論」の中でも安吾が小林の名を出していることや、「教祖の文学」と題した小林秀雄論を書いているということ、さらには対談までも行っているということから、安吾にとって小林の存在は大きなものであったと考えることができるからである。まずは小林秀雄の歴史認識というものをまとめておく。

小林秀雄の歴史認識については、過去にも数多くの論者が触れてきたことでもある。その際に触れられることの多いテクストのひとつに「歴史について」[19]というものがある。ここで小林は「自然は人間には関係なく在るものだが、人間が作り出さなければ歴史はない。歴史は人間とともに始り人間とともに終る」[20]という言葉について考察を加えている。まず「自然」は「疑ひもなく僕等の外部に在」り「一対象として僕等の精神から切離さなければ考へられない」ものだと言う。一方「歴史」については「歴史が僕等の外部に在るといふ事が言へるだらうか。僕等は史料のない処に歴史を認め得ない。そして史料とは、その在るが儘の姿では、悉く物質である」と述べる。さらに「史料」とは「自然の傷」であり、「傷たる限り、自然とは、別様の運命を辿

り得ない」ものであると言う。それならば、「史料」から「自然」ではなく、「歴史」を読むことは人間の能力に左右されるものであるというものである。そして小林はその「能力」を二つ挙げている。一つは、「人間を自然化しようとする能力」であり、もう一つは「自然を人間化しようとする能力」である。小林は前者の能力は「自然への屈従こそ、その絶対の条件」であり、「自然への屈従によつて、自然の認識はその純粋を期する」とするが、後者の能力については以下のように述べている。

自然を人間化する能力は、言はば生き物が求める欲望に根ざす、本質的に曖昧な力である。無論これは非合理的な力であり、自然は元来人間化なぞに応ずるものではない。従つて人間化された自然とは、その純粋な形では、神話に他ならず、言ひ換へれば僕等の言葉に支へられた世界である。

この引用部に続いて「歴史は神話である」と述べる小林の言葉からは「歴史」は「人間化された自然」であると認識していることがわかる。さらに、「歴史の認識はどうしても純粋な姿を取り得ない」という言葉に続けて次のようにも述べている。

言はば歴史を観察する条件は、又これを創り出す条件に他ならぬといふ様な不安定な場所で、僕等は歴史といふ言葉を発明する。生き物が生き物を求める欲求は、自然の姿が明らかになるにつれて、到る処で史料といふ抵抗物に出会うわけだが、欲求の力は、抵抗物に単純に屈従してはゐない。この力にとつて、外物の検証は、歴史の世界を創つて行く上で、消極的な条件に過ぎないので、どんなに史料が豊富になつても、その網の目のなかで僕等の想像力は、どこまでも自由であらうとするだらう。

この「歴史について」において述べられている小林の歴史認識とは、「人間を自然化しようとする能力」（自然への屈従を絶対の条件とする「自然科学的能力」）と「自然を人間化しようとする能力」（史料が豊富になったとしても、その網の中でどこまでも自由であろうとする「想像力」）という二つの能力の関係の中で紡ぎ出されていくものであるということができるだろう。しかし多くの先行研究によってすでに指摘されているように、このような小林の歴史認識は、戦争という出来事に直面することによって変化していくことになる。[21]一九四二年六月年に発表された「無常といふ事」の中では次のように述べられている。

歴史というものは、見れば見るほど動かし難い形と映って来るばかりであった。新しい解釈なぞでびくともするものではない、そういう事をいよいよ合点して、歴史はいよいよ美しく感じられた。

歴史には死人だけしか現れて来ない。従って退っ引きならぬ人間の相しか現れぬし、動じない美しい形しか現れぬ。思い出となれば、みんな美しく見えるとよく言うが、その意味をみんなが間違えている。僕等が過去を飾り勝ちなのではない。過去の方で僕等に余計な思いをさせないだけなのである。

かつては、史料という「抵抗物に単純に屈従」せずに「想像力」を駆使することを強調していた小林が、「動かし難い」「歴史の美」とい

うものを強調するに至っているのである。このような小林の歴史認識は終戦後にも変化はなかったと思われる。というのも、「無常といふ事」は、同時期に書かれたその他の評論とともに、加筆、修正を施して、一九四六年二月に創元社から評論集『無常といふ事』として刊行されたからである。[22]次節で扱う坂口安吾の「教祖の文学」は『無常といふ事』に採録されている作品の引用があることからも『無常といふ事』を踏まえての小林の歴史認識に対して書かれたものであることがうかがえる。そこで、前節で触れた安吾の歴史認識の変化を小林の歴史認識の変化と関係づけながら論じていく。

5　坂口安吾と小林秀雄（二）

「教祖の文学」は一九四七年六月に発表された安吾の小林秀雄論である。まずは「教祖の文学」の考察に入る前に、「堕落論」において安吾が小林秀雄の名を出していた箇所に注目したいと思う。

> 小林秀雄は政治家のタイプを独創をもたずたゞ管理し支配する人種と称してゐるが、必ずしもさうではないやうだ。政治家の大多数は常にさうであるけれども、少数の天才は管理や支配の方法に独創をもち、それが凡庸な政治家の規範となつて個々の時代、個々の政治を貫く一つの歴史の形で巨大な生き者の意志を示している。政治の場合に於て、歴史は個をつなぎ合せたものではなく、個を没入せしめた別個の巨大な生物となつて誕生し、歴史の姿に於て政治も亦巨大な独創を行つてゐるのである。この戦争をやつた者は誰であるか、東条であり軍部であるか。さうでもあるが、然し又、日本を貫く巨大な生物、歴史のぬきさしならぬ意志であつたに相違ない。日本人は歴史の前ではたゞ運命に従順な子供であつたにすぎない。政治家によし独創はなくとも、政治は歴史の姿に於て独創をもち、意慾をもち、やむべからざる歩調をもつて大海の波の如くに歩いて行く。何人が武士道を案出したか。之も亦歴史の独創、又は嗅覚であつたであらう。歴史は常に人間を嗅ぎだしてゐる。

ここでは小林秀雄の名前を挙げながら、「歴史のぬきさしならぬ意志」によって「日本人は歴史の前ではたゞ運命に従順な子供であつた」ということが書かれている。これは先にも述べたように、運命論的な歴史認識を感じさせる箇所である。山根龍一は「「堕落論」が〈歴史〉に関するコンテクストとして敷いているのは、（中略）戦中・戦後を通じて小林が〈歴史の必然〔性〕〉という特定の観念を主題化する際、不可避的に召喚されるとおぼしき諦観にも似た静的な歴史観」であることを指摘し、以下のように結論づけている。

> したがって「堕落論」の独自性の一端は、戦時下の内的動揺を通じて小林秀雄が戦後に持ち越したフェータリスティックな歴史観を、作中にあえて彼の名前を挙げることで内面化しつつ、その上でそれを批判―克服していくような、個々人の〈堕落〉を方法手段とした〈歴史〉と人間主体との双方向的で力動的な相関関係の構築可能性を示し、結果的にそうした身振りが、戦後初期の小林の発言に対する内在批判となり得ている点にある。

つまりは、小林を批判した先に安吾が見出したものが、先に指摘したようなポストモダン的な歴史観だったと言えるのではないだろうか。それでは、安吾が直接小林秀雄を俎上にあげ、「堕落論」で安吾がと

った、ある意味では回りくどいとも言える方法とは違い、「歴史の必然などというものは、どこにもない」とまで述べ、小林とは真っ向から対立した「教祖の文学」について考えていきたいと思う。

まずは前節でも述べたことだが、「歴史について」を書いたときの小林は、「自然（歴史）」と「人間」の関係として、双方向的な力関係を考えていたことがわかる。しかし、後には「自然（歴史）」の必然というものを強調するようになったということも確認した通りである。一方で安吾は、このような図式にあてはまらない考えを示している。

生きてる奴は何をやりだすか分らんと仰有る。まったく分らないのだ。現在こうだから次にはこうやるだろうという必然の筋道は生きた人間にはない。死んだ人間だって生きてる時はそうだったのだ。人間に必然がない如く、歴史の必然などというものは、どこにもない。人間と歴史は同じものだ。ただ歴史はすでに終っており、歴史の中の人間はもはや何事を行うこともできないだけで、然し彼らがあらゆる可能性と偶然の中を縫っていたのは、彼らが人間であった限り、まちがいはない。

歴史には死人だけしか現われてこない、だから退ッ引きならぬギリギリの人間の相を示し、不動の美しさをあらわす、などとは大嘘だ。死人の行跡が退ッ引きならぬギリギリなら、生きた人間のしでかすことも退ッ引きならぬギリギリなのだ。

ここでは、「人間と歴史は同じものだ」と述べている安吾の言葉を、そのまま鵜呑みにするのは危ういことかと思われる。安吾のレトリックに振り回されずに、前後の文章をよく読んでみると、「人間と歴史は同じものだ」と述べた直後には、同じではないところを安吾自身が指摘しているからである。ここで安吾が言いたいこととは、「人間に必然がない」のと同様にして、「歴史の中の人間」も生きていたときには「必然の筋道」を生きてはいなかったということである。つまり安吾は小林の言う「歴史の必然」というものを否定するために「人間と歴史は同じものだ」という言い方をしているのである。そして「必然」を否定するとともに安吾は「偶然」について説く。

生きている奴は何をしでかすか分らない。（中略）物の必然などは一向に見えないけれども、自分だけのものが見える。自分だけのものが見えるから、それが又万人のものとなる。芸術とはそういうものだ。歴史の必然だの人間の必然などが教えてくれるものではなく、偶然なるものに自分を賭けて手探りにうろつき廻る罰当りだけが、その賭によって見ることのできた自分の世界だけだ。創造発見とはそういうもので、思想によって動揺しない見えすぎる目などに映る陳腐なものではないのである。

安吾は、「人間」が「偶然なるものに自分を賭けて手探りにうろつき廻る」ことによって「自分の世界」を「創造発見」することができ、そこから「芸術」や「文学」が生まれるということを述べている。また、次のような箇所からは安吾が「文学」と「人生」を同じものとしてとらえていることがうかがえる。

文学は生きることだよ。見ることではないのだ。生きるということは必ずしも行うということでなくともよいかもしれぬ。書斎の中に閉じこもっていてもよい。然し作家はともかく生きる人間の退ッ引きならぬギリギリの相を見つめ自分の仮面を一枚ずつは

ぎとって行く苦痛に身をひそめてそこから人間の詩を歌いだすのでなければダメだ。生きる人間を締めだした文学などがあるものではない。

小林のように「歴史の必然」を唱え、運命論的な認識を持ってしまうと、「文学」、さらに言えば「人生」がなくなってしまう。このような安吾の考えは「堕落論」からも読み取ることができる。「運命に従順な子供」であれば「考える必要がな」く、「美しいものがあるばかり」であった。しかしそこには「人間がなかった」。「戦争中の日本は嘘のような理想郷で、ただ虚しい美しさが咲きあふれていた。それは人間の真実の美しさではない」。こう考えると安吾は、「堕落論」の中で「政治」と「歴史」を同義として扱っていたが、末尾の一文である「政治による救いなどは上皮だけの愚にもつかない物である」という言葉からは、すでに「歴史の必然」を否定する姿が見て取れる。

ここまでの考察をまとめたいと思うが、そもそも小林は「自然（歴史）」と「人間」という要素を対立項としてあげながら語っていた。対立項としてあるからこそ、そこには力関係が生まれ、「人間」が「自然（歴史）」に屈従するという結果が生じるのである。そこで安吾は、ポストモダン的な観点から「自然（歴史）」と「人間」の関係の相対化を図り、両者間の力関係をなくすという考えに至ったのではないだろうか。それは「人間と歴史は同じものだ」という言葉にもあらわれていると言えるだろう。

安吾は、小林秀雄と行った対談の中で「小林さんは歴史ということを言うけれども僕は歴史の中には文学はないと思うんだ」と発言している。また「教祖の文学」では、「歴史には死人だけしか現われてこない、だから退ッ引きならぬギリギリの人間の相を示し、不動の美しさをあらわす」という小林の考えを批判したものの、安吾は「教祖の文学」以降において「歴史」を題材とした作品を多く書いていくことになる。それはやはり、歴史の中の死人でさえも「あらゆる可能性と偶然の中を縫っていた」ということを証明するために「歴史」を題材とした作品を書いていったとも言える。歴史を題材とした作品で安吾が書いているのは「歴史には死人だけしか現われてこない、だから退ッ引きならぬギリギリの人間の相を示し、不動の美しさをあらわす」という小林に対して、歴史の中の死人からでも、生きていたときの「偶然性」をもってして、もがいた姿であると思われる。安吾と「歴史」との関係というものは、小林秀雄との応答関係によって構築されていったという側面もあるのではなかろうか。

注

[1] 本文の引用は筑摩書房版『坂口安吾全集』に依った。

[2] 安吾が「始まり」にこだわっているという観点は、五味渕典嗣の論考（「坂口安吾の戦後天皇論（1）―『安吾の新日本地理』を手がかりに―」（『大妻国文』第三八号　二〇〇七・三））から示唆を得た。

[3] 「続堕落論」は、最初『文学季刊』には「堕落論」の題で発表されたが、一九四七年六月、銀座出版社から出版された単行本『堕落論』に収録する際に「続堕落論」に改題されている。

[4] 「坂口安吾事典〔作品編〕」（『国文学　解釈と鑑賞　別冊』二〇〇一・九）

[5] 城殿自身は、「続篇での安吾は、「堕落論」にみられた警句的な表現の多義性を捨て」ていると述べており、「堕落論」と「続堕落論」との差異を示唆している。

[6] 柄谷は、ハイデガーにおける「頽落」（verfall）と安吾の「堕落」とを対比させ、「頽落」は「共同存在」に向かうことであるが、「堕落」は「共同存在」か

ら「堕ちる」ことであるとしている。また、「「堕落」とは、モラルとインモラルの対立を突き抜けるような地点に「堕ちる」こと」だとも述べ、「文学のふるさと」における安吾の言葉を積極的に参照しながら論じている。さらには「文学のふるさと」だけでなく、「ナンセンス」（「ピエロ伝道者」）や「ファルス」（「FARCEについて」）などの言葉も用いながら、安吾の思考の一貫性、連続性が強調されている。（『坂口安吾と中上健次』（太田出版　一九九六・一））

[7] 五味渕典嗣「坂口安吾の戦後天皇論（二）―安吾における〈始まり〉をめぐって―」（『大妻国文』第三九号　二〇〇八・三）

[8] 具体的には次のように述べられている。「「日本の精神そのものが耐乏の精神であり、変化を欲せず、進歩を欲せず、憧憬賛美が過去にむけられ、たまさかに現れいでる進歩的精神はこの耐乏的反動精神の一撃を受けて常に過去へ引き戻されてしまう」「日本全体が、日本の根底そのものが、かくの如く馬鹿げきっている」等、「日本」「日本人」総体を手厳しく攻撃する言辞があると思えば、「我等国民は戦争をやめたくて仕方がなかったのではないか」「我々国民はさのみ天皇を崇拝しないが、天皇を利用することには狎れて」いるともあって、つまりは自身も「狡猾」な「国民」意識から自由でない、と受け取れる言葉も読まれる。」

[9] 山根龍一「坂口安吾「堕落論」論―歴史と人間との関係をめぐる懐疑の方法について―」（『国語と国文学』第八六巻第二号　東京大学国語国文学会　二〇〇九・二）

[10] 神谷忠孝「『堕落論』」（『国文学　解釈と鑑賞』第五八巻第二号　一九九三・二）

[11] 山根前掲論文

[12] 神谷前掲論文

[13] 中島健蔵「織田作之助と坂口安吾」（『新潮』第四四巻第二号　一九四七・二）

[14] 五味渕前掲論文

[15] 藏滿茂明「占領初期における天皇制をめぐる動向」（『文学研究論集』第三二号　明治大学大学院文学研究科　二〇一〇・二）

[16] 五味渕典嗣「坂口安吾の戦後天皇論（二）―安吾における〈始まり〉をめぐって―」（『大妻国文』第三九号　二〇〇八・三）

[17] 五味渕前掲論文

[18] 粟屋憲太郎編『資料日本現代史二』（大月書店　一九八〇・一〇）

[19] 初出は「文芸」（一九三九・五）だが、のちに「ドストエフスキイの生活」の序文として採録されている。

[20] 本文の引用は新潮社から出版されている『小林秀雄全集』に依った。

[21] 例えば、大原祐治は、座談会「近代の超克」における小林の発言を引き、「小林はかつて「歴史」叙述に関して述べていた行為遂行的な認識を失い、それを美学化してしまう水準にまで後退している」ことを指摘している。（『文学的記憶・一九四〇年前後―昭和期文学と戦争の記憶』（翰林書房　二〇〇六・一一））

[22] この加筆、修正については大原祐治が考察を加えており、そこでは加筆、修正によって執筆日と思われる日付が削除されていることなどから「小林は、時間的にも空間的にも抽象度を上げた形で、戦争中における自らの言葉を『無常といふ事』という書物として戦後に再投入したのだと言えよう。それは小林にとって、座談会「近代の超克」での発言などに見られるような戦時中の危うい後退戦というコンテクストから、自らの言葉を引き離すということに他ならない。その上、よく知られるように敗戦直後における一定の期間、小林は新たに書き下ろした言葉を発表することがなかった。その意味で小林の言葉は、予め対話の回路を断つことで、戦後における自らの位置を確保することをはっきりと志向している」（大原前掲著）と述べられており、非常に参考となった。

（比治山女子中学・高等学校講師）